

合唱活動参加者の意識変容

—共同学習者間の相互行為・実践コミュニティ参加の視点から—

小坂 光

(広島大学大学院人間社会科学研究科博士課程後期)

The Transformation of Consciousness for Singers: From the Perspective of Interaction and Community of Practice

Hikari KOSAKA

Abstract

Although music learning has the main purpose of becoming able to play music and gaining skills, it is also important for singers to consider how they and others have transformed through the activity. The transformation of singers' views toward learning music is interrelated with the transformation of their thoughts, values, attitudes, and renewing them with new experiences is a critical aspect of music learning. In particular, since chorus is a collaborative activity, the transformation of individual views may be influenced by specific consciousness in the activity. Further, belonging to a chorus and working also engender a perspective of how to behave as a member and gaining a mindset. This study aims to consider the influence of interaction and gaining a mindset that occurs in singers in the practical community from a sociological approach. Participation in the expressions within a chorus group can be a reflection of the singers' "participation in performance". The transformation of a singer's perspective toward music learning is carried out during performing as well as when reflecting past performing and learning. This can constitute an opportunity for singers to attribute meaning to what they sing. Additionally, participation in the practice community engenders singers' orientation. Finally, the attitude of striving according to that orientation is a mentality born in the practice community, and it is critical for becoming an independent singer.

1 はじめに

生涯音楽学習とは、学校での音楽の授業や活動、音楽の個人レッスン、成人が趣味として音楽活動をおこなうことなど幅広い学習を指す。音楽学習には音楽の演奏や技術の獲得という主な目的があるが、その一方で、活動のなかでどのように自分や他者が変容したのかという視点も重要である。学習に対する認識の変容は、自らの思考、価値観、態度等の変容と相互関係にあり、新しい経験によってそれらを刷新することは、学びの重要なポイントになる。メジロー (2012) は、「人びとは、これまでの知識獲得の方法に磨きをかけることで変化する状況に適応しようとするよりは、むしろ変化するできごとをより完全に理解し、自分の生活に対する枠組みを手に入れねばならないと考えるようになる。子ども期の形成的学習 (formative learning) は、成人期においては変容的学習 (transformative learning) へと変化するようになる」(p.5) と述べ、変容的学習の理論を展開している。生涯学習として音楽活動に参加する人々も、変容する可能性をもつ学習者としてとらえることができる。小坂 (2020a) では、10人の合唱活動参加者を対象に、合唱活動の参加者が活動を継続することでどのように変容したかについての研究をおこなった。その結果、生涯発達段階や指導者・共同学習者の影響によって学習者の音楽学習に対する認識の変容が起こっていることが明

らかになった。

合唱は他者との共同的な活動であるため、個人の意識変容には、活動のなかでうまれた共同学習者間での特別な意識が影響している可能性がある。加藤（2008）は「合奏や合唱とは、相互に独立した意識を持つ個体が集まって同時に同じ楽曲を演奏したり歌ったりしている状態ではなく、合奏や合唱をすることによって個々の意識の流れが融合し、一つの集合的な意識となっている」（p.100）と述べるように、合唱活動をおこなうことで、共同体の一員として学習の場に参加しているという意識が生まれる可能性がある。

また、合唱団に所属して活動するということには、団員としてのふるまい方やメンタリティの獲得という視点も含まれる。ウェンガーら（2002）は、「あるテーマに関する関心や問題、熱意などを共有し、その分野の知識や技能を、持続的な相互交流を通じて深めていく人々の集団」（p.33）として、実践コミュニティをあげている。ある団体に所属して活動をするということは、自分たちに共通する問題についてメンバーで考えながら協力して問題を解決したり、新しい考えを創出したりする。実践コミュニティのメンバーは共通の知識やアプローチを構築するだけではなく、自分たちが取り組むテーマについて独自の見解をもつようになり、相互交流の方法を確立することになる。合唱活動に参加することも実践コミュニティに参加する行為のひとつであり、技術の向上だけではなく、熱心に練習に参加する姿勢や、他者と力を合わせてひとつの音楽を作り上げるためにおこなう努力が及ぼす影響は、舞台でのパフォーマンスの成功のみにとどまらず、団員のメンタリティにも及んでいると考えられる。しかし、団員は指導者によって方向づけられた志向や行為に対して懐疑的になったり、実践コミュニティへの関わりを選択することができる。生涯学習の領域では、活動をおこなうように強制されたり、義務的に活動に参加したりするのではなく、自分で何をどのように学ぶのかを考えて取り組むことができる「自立した学習者」が目指されている。実践コミュニティに所属しながら、どのように自分が実践コミュニティとかわかっていくのかについて考えていくということが、自立した学習者には求められるのである。

本稿では、合唱活動に取り組む学習者に起こる「学習に対する認識の変容」における「共同学習者との相互行為」や「実践コミュニティにおけるメンタリティの獲得」からの影響について、社会学的視点から検討することを目的とする。

2 学習者の変容

メジロー（2012）は、成人の学習がどのように構造化されているのかを説明するとともに、自分の経験を把握し解釈するさいに用いる準拠枠（意味パースペクティブ）が、どのようなプロセスで変化あるいは変容するのかを明確にすることを目的とした研究を行い、意識変容の学習について述べている。

生涯学習は、学習者の人生の文脈で動機づけられた結果生じたものであり、パースペクティブの変容にかかわる。生涯学習において、知識や技術の習得はもちろん、成人が自らの経験を振り返りながら自分を高めていくことも重要である。三輪（2009）は、「意識変容をめざす学習プロセスは、自分がこだわる「パースペクティブ」（ものの見方の方向性）や「価値観」（その人が受け入れている社会的原理）に気づくことから始まり、さらに、その価値観を生み出している「前提」（当然と思っていること）を省察しながら、新たな価値観を受け入れ、統合していくプロセスとなる（p.146）」と述べている。この学習をすすめるためには、自分もっている前提に対して批判的にふり返り、その前提が正しいかどうか検討することが必要である。前提が正しいと確認できると安心し、妥当ではないとなると前提が変更され、意識変容の学習が起こる。前提が変更された結果、個人がもつ価値観の変化につながり、新しい価値観に基づいた行動が生まれる。メジローは、学習者が自己について批判的に振り返るプロセスを、一人ひとりの意味パースペクティブの再形成につながるものと考えた。

自分の価値観に気づくという行為は、他の人の価値観が存在しないと起こりえない。三輪（2009）は、「この学習はひとりだけで行うものではなく、グループで確認しあいながら進められるものである」（p.146）と述べている。他の人の価値観を知ることにより、自分の価値観を生み出す前提を省察することができ、さらに新しい価値観を受け入れたり、むしろそれを受け入れないという選択をすることができる。この過程をとおして人間は経験や意味を再構成し、パースペクティブを変容させていく。意識変容の学習が始まるのは非常事態に出会ったときが多く、問題を再定義することによってのみ説明ができるようになる。

また、三輪（2009）は、「自己決定学習ができること」を成人学習の前提とするのではなく、成人学習者が「自己決定的」になっていくような学習プロセスをとらえることが重要だと述べている。

生涯学習においては、「現在の自分に対して新しい価値や意味を創り出していこうとする変容を自分で省察しながら学習を深化させていく」というプロセスが重要である。小坂（2020a）では、実際に学習プロセスを学習者が省察し、過去の自分に対して現在の自分が価値づけをおこなうライフストーリー手法を用いて、10人の合唱活動参加者にインタビューを行った。その結果、生涯発達の視点からみた音楽学習に対する認識の変容のプロセスモデルを提示した。大学生期には「悩み・葛藤」のもとに学習との関わり方に迷い、成人前期には「新しい学び」「自分の能力の活用」によって学習が深まり、成人後期には「最適な学習方略の選択」「自由な学びの実現」によってより学習が豊かになり、高齢期には「学習への不安」や「諦観」と戦いながら学習と向き合っていくという認識の変容がみられた。このような認識の変容は、音楽学習に対して自己決定的とはいえなかった大学生期から、徐々にどのように音楽学習と向き合っていくかについて考え、豊かな学びを実現したり、どのように活動と生活を両立していくのか考える点で、音楽学習における自己決定性を高めるプロセスを記述したといえるだろう。

しかし、学習者が共同学習者から影響を受けたとされる内容の詳細については記述できていないため、どのような行為や場面において、共同学習者が学習者の意識変容のきっかけを与えているのかという点については課題が残されている。

3 共同学習者間にうまれる相互行為

小坂（2020b）では、現象学的社会学者であるシュッツの汝志向や木村（1988）の音楽演奏成立の契機、チクセントミハイのフローやグルーブする感覚などの理論をもとに、音楽のなかでの相互行為について検討した。共同的な音楽活動は、「他の学習者との一体感」を感じさせるものであるという通念がありながら、学習者同士がもつ特別なコミュニケーション構造について理論的に整理された研究はなかった。シュッツは、共同的な音楽活動を「特別な志向作用が他者の体験そのものに向けられる」行為であるとし、このような体験をともしおこなうことが「われわれの経験の流れとして一生きること」に通ずると述べている。また、学習者同士が「同じ生命的時間を生きること」によってお互いの関係が構築されていくことや、グルーブする感覚やフロー体験によって音楽的なスキルや継続意志が高められている可能性に言及した。また、その場の人々の、新しい発想を受け入れる力によって相互行為における創造性が高められることや、同じ空間で同じ感覚を共有するための時間を過ごしていくことが、音楽における相互行為の意味であるということを示した。

しかし、小坂（2020b）で示された相互行為以外にも、練習のなかの発話や試行錯誤の繰り返しによって、指導者と学習者の間や学習者間において相互行為が生み出されている可能性がある。

西阪（2008）は、ヴァイオリンの教授場面について、相互行為の視点から分析をおこなっている。発話は、前の言葉の直後にある以上、前の言葉に関連したものとして聞かれる。つまり、ある言葉を発することは、その後の発話の「枠付け」をおこなう、前提条件を整える役割をもつ。例えば、3歳児のヴァイオリンのレッスンの際に、教師が実際に弾く場面で「これを見て」と伝え、3歳児は「見る」という行為はおこなうかもしれないが、「教師の演奏したものを見て自分に生かそう」とまで考えが至るとは限らない。見せたものをそのまま弾かせたければ、「これを見て、同じように弾いてね」と伝えるほうが、「枠付け」はうまくいくだろう。しかし、西阪は「枠付けにより際立たせる」というやり方はじつは単純ではなく、枠付けののちに実際になにがくるかは、相互行為におけるさまざまな偶然的条件に依存していると述べる。はじめに発された言葉がうまく「枠付け」として機能していないと、その後の展開がうまくいかない。「枠付けられた当のものがその枠付けに従って際立たせられるということ、このこと自体が、相互行為の具体的な展開のなかで、その展開の現在の状態にふさわしいやり方で、達成されなければならない」（pp.76-77）と述べる。この状況をうまく機能させるためには、「枠付け」をうまくおこなうことのほかに、相互行為のなかで相手の思考の配分を管理・調整し、相互行為を組織することが重要だと西阪は述べる。相手にわかるようなやり方で見るべきものを見て、特定の対象に対する両参加者（指導者と学習者）の志向が適切に配分されるなかで、教示は初めて産出される。西阪は、相互行為の展開のなかで活動を組織していくため

には、「相手の身体および環境に対して中心のおよび周辺の志向を適切なやり方で配分していかなければならない」(pp.86-87)と述べ、このようなプロセスを「参加の組織・再組織」とよんでいる。相手の身体や環境に対する志向をコントロールしていくためには、学習者の志向をよく知らなければいけないが、音楽の場で一緒に過ごす時間(生命的時間)が長くなると、お互いに「ここが重要なのだ」と気づくようになっていたり、お互いの志向が予測できるようになる。

佐藤(2002, 2003)は、学生のアマチュア・オーケストラの合奏とリハーサルの過程の分析をとおして、協同的表現活動という相互行為についての研究をおこなっている。楽譜上に示された音に対して、演奏者同士の会話がどのような相互行為を引き起こしているかについて解釈をおこない、行為の結果を常に探索しながら、より望ましいものを生成していることを示唆している。トップ分奏が「パート間で相互調整とその結果を共有できるようなパート間を結び、合奏のための情報を共有するという装置」「他のパートとの演奏の仕方をぶつけ合わせ、時にはあえて相互に葛藤と摩擦を起こさせることで逆にそこを通して問題の部分ははっきりと浮かび上がらせ、さらには解決の方策を探していこうという機能」をもつことをはじめ、リハーサルの過程からさまざまな相互行為をみとっている。「個々の演奏者は集団の中で合奏という形で共同的な表現活動に参加することで、自己の表現が集団的な表現形成に参加しているということと、同時に集団的な合奏の中に置かれ、規定されることではじめて自己の演奏表現の位置づけが与えられてくることを知るようになる」(p.250)と述べるように、演奏中でも、練習中の対話でも、その集団の表現形成に参加することによって世界と自分の演奏の関わり方が規定される。個人と世界は、行為によってしか関わるることができない。そして、行為は他者との比較や集団のなかでの意味づけとしてしか機能しない。これらのことから、集団での表現形成に参加することは、学習者の「演奏に参加すること」に対して省察を与えるものになる可能性がある。

4 実践コミュニティにおけるメンタリティの獲得

同じ集団の一員として、音楽的な時間をともに過ごす「生命的時間の共有」をしているうちに、その集団に所属するものとしてのメンタリティがうまれる可能性がある。ここで示す「集団」「共同体」とは、制度的な組織ではなく、音楽を演奏するために組織化された、実践のコミュニティを指す。

フッサール(2013)は共同体論として以下のように述べる。

社会的作用、《我一汝一作用》、特殊な《私たち一作用》が、理解にもたらされねばならない。その後、社会的結合が、(統一化された私たちの連帯における)習慣的な私たちの習慣的連帯として解明されるべきである。[中略] 結びつけられた人格の習慣性は、一方では、個々人にとって、彼らに帰属する習慣性や、彼らの内に内在し、係留する意志の方向性である。しかし諸人格というのは、彼らが結合しているかぎりでは、個別化されてはいない。この習慣性へと、相互に対する存在と相互に内在する存在や、合致してあること、また多人数からなる意志の統一へと参加していることが、入り込んでいく。この結合は、作用—自我と他なる作用—自我とのあいだで作用—自我の数多性にとっての統一を産出する。そのようにして、より高次の秩序の人格性が、持続的に存在するものとして構成される。

(フッサール, 2013, pp.402-403, 下線は筆者による)

そこから初めて人格的な結合と、結び付けられた人格的存在の形式論の構築が始まるのであり、それは結び付けられた人格的な作用のうちで表れている。その作用の生にもとづく多数の作用に、個々の仲間たちは「参加する」のである。[中略] 共同体の存在の呈示に関する個々の主観的な様式を生じさせるのであり、その共同体において作用はまさにその共同体にとっての作用なのである。

(フッサール, 2013, pp.403-404, 下線は筆者による)

筆者の意図する「実践コミュニティに所属するものとしてのメンタリティ」が、フッサールの言葉では「習慣的連帯」としてとらえることができる。自分と他者との間にうまれている特別な作用によって、集団の成員間には特別な社会的結合がおこっており、さらにその結合の中身として習慣的連帯が理解される

べきだと述べている。また、その習慣は成員間で「自分も相手ももっているメンタリティ」「自分はもっていないが相手はもっているメンタリティ」「自分はもっているが相手はもっていないメンタリティ」に分かれており、それらが合致することや、それぞれのメンタリティがありながらも意志の統一をはかっていくことで、集団としての高いメンタリティが構成される。

一般に用いられる「社会」という概念には「関係によって築きあげられる共同体」と、関係を欠いたばらばらな人間の寄せ集めである「関係喪失の社会」とが混在している、とブーバーは言う。関係喪失の社会が、人格的関係の断絶した永遠に沈黙する「それ」の世界であるとすれば、真の共同体は、世界への語りかけが人格的な応答と出会う「我—汝」の対話的關係から捉えられねばならないであろう。(平石・山本, 2004, p.66, 下線は筆者による)

レイヴ&ウェンガー (1993) は、学習を特定のタイプの社会的共同参加という状況の中におき、学習は共同参加者にわから持たれており「一人の人間の行為ではない」と主張し、「状況的学習論 (正統的周辺参加)」を理論づけている。徒弟制において新参者が古参者になっていくような、学校以外での文化的継承を学習として重視し、「全体像の理解を経てコミュニティに参加していく過程こそが学習」と考えた。

学習者は、ある技能の熟達者と関わりながら、正統的周辺参加者として集団の基準に従いながらその基準を再生産しており、実践コミュニティの再生、変容をおこなっている。

学習者は否応なく実践者の共同体に参加するのであり、また、知識や技能の修得には、新参者が共同体の社会文化的実践の十全的参加 (full participation) へと移行していくことが必要だということである。「正統的周辺参加」は、新参者と古参者の関係、活動、アイデンティティ、人工物 (artifacts)、さらに知識と実践の共同体などについての一つの語り口を提供するものである。これは新参者が実践共同体 (community of practice) の一部に加わっていくプロセスに関係した話である。一人の人の学習意図が受け入れられ、社会文化的な実践の十全的参加者になるプロセスを通して学習の意味が形作られる。この社会的プロセスは知性的技能 (knowledgeable skills) の修得を含む、というよりも、実際包摂しているのである (レイヴ&ウェンガー, 1993, pp.1-2)。

学習者が十全的参加者になるプロセスを学習としてとらえると、まさにそのメンタリティの獲得こそ、学習の重要な一部である。合唱活動には、ただ全体で曲を作り上げていく合唱をおこなう時間だけではなく、発声練習やハーモニーの練習など、基礎的な練習も含まれる。しかし、合唱団ごとにその練習の内容や、重要とされている面も異なる。練習に参加する過程で、学習者は合唱団の一員として「自分は何を大切に活動に取り組んでいくか」を考える場面に出会うことになる。そのときに、「周りの人の声は気にせず、とにかく自分の声を磨き上げよう」「この集団で溶け合う声をめざそう」など、それぞれの学習者の志向がうまれる。このような学習者の志向がうまれ、努力する姿勢こそが、集団の中でうまれる「自立した学習者」に向かうためのメンタリティである。

また、指導者が学習者にうまくメンタリティを獲得させることができるかどうかは、学習者がどのように活動に関わりあえるかに依存している。レイヴ&ウェンガーは

学習が「ポータブル」な相互作用的技能の発達にあるのだとすると、共同参加者が共通のコードを共有していないときでも学習が成立することになる。徒弟が親方の仕事ぶりを理解できるかは、その業務やその業務に含まれている事項について同一の表象をもっているかに依存するわけではない。むしろ、共同でその業務に関わり合えるかに依存している。同様に、親方が徒弟に効果的学習をつくり出せるかは徒弟に自分の概念表象をうまく教え込めるかに依存しているわけではない。むしろ、徒弟が自分の持場で成長できるように、親方の方で参加の仕方をうまく仕分けてあげられるかに依存している。やはり学習の基盤を提供するのはこの共同参加ができる共通の能力であって、記号や、指示対象がもつ構造の共通性ではないのである。(レイヴ&ウェンガー, 1993, p.16)

と述べている。つまり、音楽的能力の異なる多数の学習者それぞれに対して技術の習得を教えるのではなく、指導者が学習者の参加の仕方をうまく調整することによって、学習者はその実践コミュニティのなかで成長・変容できる可能性をもつ。学習者が、仲間同士や仲間に近い関係同士で知識の伝え合いが可能な場合には、それはとびぬけて迅速で効果的だと指摘されるように、指導者から内容や方法を教わるだけではなく、同じ立場にいる共同学習者から教わることによって、共感的に理解ができる可能性もある。

小江（2018）は、組織成員が実践共同体への参加を通じて、他者やモノとの関係性の一部となっていくなかで、共同体における自分の関わり方や立場、他者からの自分に対する印象、接し方、すなわちアイデンティティが変容していくと述べている。また小江は、共同体内における学習の参加の類型を5つに分類している。1つ目は「周辺の参加」で、新人が周辺の立場から熟練者としての十全的参加に至る参加である。2つ目は「周縁的参加」で、実践の十全的な参加から意図的・非意図的に距離を置く立場である。実践に関与しないこと、不慣れや馴染んでいないなどの非参加によってもアイデンティティは構築される。3つ目は実践共同体の横断的な参加である。新しい実践の経験によって、参加者がこれまでに慣れてきた実践との相違、すなわち境界を意識するような場面で、元の実践のスタイルや考え方の相違が見出されるなかで、生じる葛藤や新しい状況に対応していくための参加の変容過程が重要となる。4つ目は、共同体同士の協働的な関わりである。5つ目は、複数の共同体同士の関係や利害を調整したり影響を与えたりする存在である。これは、共同体に新しいアイデアや関心、スタイル、情報をもたらす存在である。以上の5つの類型を合唱活動の文脈にあてはめると、周辺の参加は熟達に向かって学習を深化している学習者の姿、周縁的参加は練習に対して懐疑的な学習者や、まだ活動に不慣れな学習者の姿としてとらえられる。共同体の横断的な参加とは、1人の学習者が2つ以上の集団の成員として活動している姿ととらえられる。共同体同士の協働的な関わりとは、2つ以上の団体が一緒に演奏会や企画などをおこなって活動する姿、複数の共同体同士の関係や利害を調整する関わりとは、コンクールなどで他の集団を意識したり、他の集団の活動を見て「こういうやり方もあるのか」と新しい視点を与えたりする姿ととらえることができる。小江は、これらの参加の類型を踏まえて、具体的な成員（本研究における合唱団員）の学習者の参加やアイデンティティの変化、実践共同体の変容過程として分析・記述していくことを課題としてあげている。参加について5つの類型が示唆されているが、実際には「どの参加の仕方が目指されているか」というよりも、学習者が自分の参加の仕方や価値観をどうとらえているかということが重要である。「1つの集団のなかでとことん音楽をつきつめたい」という学習に対する価値観もあれば、「複数の集団のなかでさまざまな音楽に触れたい」という価値観も存在する。5つの類型のなかでの良し悪しをとらえるのではなく、学習者の考える価値観に迫っていくことが求められる。

その一方で、ひとつの集団のみに所属していようが、いくつかの集団に所属していようが、それぞれの実践コミュニティの特徴や成員の影響によって学習者のメンタリティや音楽に向かう価値観が変容していることが考えられる。

崔（2018）は、成人教育理論について変容理論と状況的学習論からの検討を試みており、状況的学習論が社会的文脈と緊密に関係しているとすると、その「特定の実践コミュニティ」がどのような環境、どのような理由、どのような社会的文脈といった「状況」に置かれていて、参加者たちが参加を深めることによりその「状況」と「参加者の意識・行動の変革」「実践コミュニティの変革」がどのように影響し合い、変わっていくのかを分析視野とする必要があると述べている。つまり、「参加者の意識・行動の変革」「実践コミュニティの変革」「状況」の3つの視点から、参加のプロセスのなかでお互いにどのように影響しあいながら変革していくのか、その具体的なプロセスを明らかにすることが課題となる。そのうえで、崔はライフコースアプローチによる研究の可能性を示唆している。しかし、ライフコースアプローチの手法だけではみとることができない、一人ひとりの学習者に「状況」「意識・行動の変革」「実践コミュニティの変革」を意識させることによる実践的な研究を深めていくことも必要だろう。

5 結論・今後の課題

本稿では、合唱活動参加者の学習に対する認識の変容における「共同学習者との相互行為」や「実践コミュニティにおけるメンタリティの獲得」からの影響について、社会的視点や学習論の視点から検討を

試みた。その結果、以下の2点が明らかになった。1点目は、集団での表現形成に参加することは、学習者の「演奏に参加すること」に対して省察を与えるものになる可能性がある、ということである。学習に対する認識の変容は、学習中だけではなく、過去の学習を振り返って意味づける際にもおこなわれており、学習者が「自分が歌うこと」に対して意味づけをおこなうきっかけとなりうる。2点目は、実践コミュニティに参加することで志向が生まれ、その志向に沿って努力する姿勢が実践コミュニティのなかで生まれるメンタリティであり、自立した学習者になるために重要である、ということである。合唱活動に参加することは、同じ場所でともに歌うという行為によって、自己の省察が促されたり、音楽の技術向上や集団で演奏するうえで必要とされるメンタリティを得るという意味ももつ。ただ歌う行為に満足するのではなく、省察やメンタリティの獲得に気づき、よりよい学習者になろうとすることが、自立した学習者への変容である。

本稿では、すでに確立された理論をもとに、合唱活動参加者への転用を試みたが、実際に合唱団の活動で起こっている相互行為や団員個人のメンタリティについて研究をおこなっていくことが求められる。自立した学習者に変容していく過程について学習者一人ひとりをライフコースアプローチによって分析していくだけではなく、共同体のなかでのメンタリティの獲得については、ある集団を一定期間観察したうえで、成員間に生まれているメンタリティを分析していくことも必要である。

引用・参考文献

- フッサール, E. [浜渦辰二・山口一郎監訳] (2013) 『間主観性の現象学Ⅱ—その展開—』 ちくま学芸文庫
- 平石善司・山本誠作 (2004) 『ブーバーを学ぶ人のために』 世界思想社
- 川村有美 (2004) 「物語としての音楽の学びに関する一考察—成人のピアノ学習を中心として—」 『学校教育学研究論集』 第10号, 東京学芸大学大学院, pp.61-71
- 川村有美 (2007) 「音楽学習に関する物語的検討—成人音楽学習者の語りの分析を中心に—」 『音楽学習研究』 第3巻, pp.1-10
- 小坂光 (2020a) 「合唱活動参加者の音楽学習に対する認識の変容—生涯発達を視点に—」 『音楽学習研究』 第15巻, pp.21-30
- 小坂光 (2020b) 「合唱活動の場における相互行為」 『教育学研究紀要 (CD-ROM版)』 第66巻, 印刷中
- レイヴ, J., ウェンガー, E. [佐伯胖訳] (1993) 『状況に埋め込まれた学習—正統的周辺参加—』 産業図書
- メジロー, J. [金澤睦, 三輪建二監訳] (2012) 『おとなの学びと変容—変容的学習とは何か—』 鳳書房
- 三輪建二 (2009) 『おとなの学びを育む—生涯学習と学びあうコミュニティの創造—』 鳳書房
- 西阪仰 (2008) 『分散する身体—エスノメソドロジ的相互行為分析の展開—』 勁草書房
- 小江茂徳 (2018) 「組織成員の学習と論点—状況的学習論を手掛かりとして—」 『九州地区国立大学教育系・文系研究論文集』 第5巻第2号, pp.1-13
- 崔敏奎 (2018) 「成人教育理論の検討—「自主活動」の分析視角の検討—」 『東北大学大学院教育学研究科研究年報』 第67巻第1号, pp.19-29
- 佐藤公治 (2002) 「オーケストラの協同的表現活動と合奏の構造」 『北海道大学大学院教育学研究科紀要』 第87巻, pp.1-65
- 佐藤公治 (2003) 「オーケストラの協同的表現活動と合奏の構造 (Ⅱ)」 『北海道大学大学院教育学研究科紀要』 第91巻, pp.181-254
- ウェンガー, E., マクダーモット, R., スナイダー, W.M. [櫻井祐子訳] (2002) 『コミュニティ・オブ・プラクティス』 翔泳社